

# 共変微分：ゲージ理論からのアプローチ

中嶋 慧

February 27, 2019

## Abstract

このノートでは、第1章でゲージ理論の考え方を解説する。第2章では、ゲージ理論の考え方に従って、一般相対論の共変微分を導入、解説する。

## Contents

1	ゲージ理論	1
2	一般相対論での共変微分	5
2.1	共変微分	5
2.2	共変微分の具体的な式	9
2.3	共変微分の性質	9
2.4	共変微分の交換関係	10
2.5	テンソル密度の共変微分	11

## 1 ゲージ理論

$n$  個の実数パラメーター  $\varepsilon^r (r = 1, 2, \dots, n)$  に依存する大域的変換

$$\psi'^A(x) = [\mathbf{T}(\varepsilon)]^A_B \psi^B(x) \quad (1.1)$$

で、場の組  $\psi^A$  に対する作用が不変とする。ただし、 $\mathbf{T}(\varepsilon)$  は線形リー群  $G$  の表現になっているとする。 $\varepsilon = 0$  が恒等変換になるものとする。この時、局所的変換

$$\psi'^A(x) = [\mathbf{T}(\varepsilon(x))]^A_B \psi^B(x) \quad (1.2)$$

で作用が不変となるように、 $\psi$  のラグランジアン密度  $\mathcal{L}_0(\psi, \partial_\mu \psi)$  を修正することを考える。そのためには、

$$\partial_\mu \psi^A \rightarrow (\nabla_\mu \psi)^A \stackrel{\text{def}}{=} \partial_\mu \psi^A + (\mathbf{A}_\mu)^A_B \psi^B \quad (1.3)$$

という置き換えをすれば良い。ただし、 $\mathbf{A}_\mu$  は以下の変換則が成り立つように決める：

$$(\nabla'_\mu \psi')^A \stackrel{\text{def}}{=} \partial_\mu \psi'^A + (\mathbf{A}'_\mu)^A_B \psi'^B = \mathbf{T}^A_B(\varepsilon(x)) (\nabla_\mu \psi)^B. \quad (1.4)$$

ここで、 $\psi'^A = \mathbf{T}_B^A(\varepsilon(x))\psi^B$  である。これより、

$$\mathbf{A}'_\mu = \mathbf{T}\mathbf{A}_\mu\mathbf{T}^{-1} - \partial_\mu\mathbf{T} \cdot \mathbf{T}^{-1} \quad (1.5)$$

を得る。

ところで、 $\mathbf{T}(\varepsilon)$  は単位元の近くで、

$$\mathbf{T}(\varepsilon) = \exp[\varepsilon^r \mathbf{G}_r] \quad (1.6)$$

と書ける<sup>1)</sup>。 $\mathbf{G}_r$  は  $G$  のリー代数の基底であり、それらの交換関係は、

$$[\mathbf{G}_r, \mathbf{G}_s] \stackrel{\text{def}}{=} \mathbf{G}_r\mathbf{G}_s - \mathbf{G}_s\mathbf{G}_r = f^t_{rs}\mathbf{G}_t \quad (1.7)$$

となる。 $f^t_{rs} (= -f^t_{sr})$  は構造定数と呼ばれる実定数である。(1.6) に対して、

$$\partial_\mu\mathbf{T} = \int_0^1 ds e^{s\mathbf{E}} \partial_\mu\mathbf{E} e^{(1-s)\mathbf{E}} \quad (\mathbf{E} \stackrel{\text{def}}{=} \varepsilon^r \mathbf{G}_r) \quad (1.8)$$

である。ここで、公式

$$\frac{\partial e^{H(\alpha)}}{\partial \alpha^n} = \int_0^1 ds e^{sH(\alpha)} \frac{\partial H(\alpha)}{\partial \alpha^n} e^{(1-s)H(\alpha)} \quad (1.9)$$

を用いた。 $\alpha = \{\alpha^n\}$  はパラメーター  $\alpha^n$  の組である。証明は、この節の最後に行う。(1.8) より、

$$\begin{aligned} \partial_\mu\mathbf{T} \cdot \mathbf{T}^{-1} &= \int_0^1 ds e^{s\mathbf{E}} \partial_\mu\mathbf{E} e^{-s\mathbf{E}} \\ &= \partial_\mu\varepsilon^r \int_0^1 ds e^{s\mathbf{E}} \mathbf{G}_r e^{-s\mathbf{E}} \end{aligned} \quad (1.10)$$

となる。ところで、

$$e^{\mathbf{E}}\mathbf{G}_r e^{-\mathbf{E}} = \alpha^s_r(\varepsilon)\mathbf{G}_s \quad (1.11)$$

である<sup>2)</sup>。よって、

$$\partial_\mu\mathbf{T} \cdot \mathbf{T}^{-1} = \partial_\mu\varepsilon^r \mathbf{G}_s \int_0^1 ds \alpha^s_r(s\varepsilon) =: \partial_\mu\varepsilon^r \mathbf{G}_s l^s_r(\varepsilon) \quad (1.12)$$

<sup>1)</sup>  $U(n)$ ,  $SU(n)$ ,  $SO(n)$ ,  $Sp(n)$  の任意の元はこの形で書ける。

<sup>2)</sup>  $G$  を線形リー群とする。そのリー代数  $\mathfrak{g}$  は、

$$\mathfrak{g} = \{X \in M(N, \mathbb{C}) \mid \forall a \in \mathbb{R}, \exp(aX) \in G\}$$

で定義される。 $\mathfrak{g}$  の任意の元は  $\varepsilon^r \mathbf{G}_r$  と書ける。 $\varepsilon^r$  は実数である。 $X \in G$ ,  $A \in \mathfrak{g}$  とすると、

$$Xe^A X^{-1} = e^{XAX^{-1}} \in G$$

なので、 $XAX^{-1} \in \mathfrak{g}$  である。特に、 $X\mathbf{G}_r X^{-1} \in \mathfrak{g}$  なので、

$$X\mathbf{G}_r X^{-1} = \alpha^s_r \mathbf{G}_s$$

と書ける。

となる。

よって、(1.5)の第2項は、 $\mathbf{G}_r$ の線形結合で書ける<sup>3)</sup>。今、

$$\mathbf{A}_\mu^{(0)} \stackrel{\text{def}}{=} A_\mu^r \mathbf{G}_r, \quad (1.13)$$

$$\mathbf{A}_\mu^{(1)} \stackrel{\text{def}}{=} \mathbf{A}_\mu - \mathbf{A}_\mu^{(0)} \quad (1.14)$$

と置く。 $\mathbf{A}_\mu^{(1)}$ は $\mathbf{G}_r$ の線形結合では書けない部分である。これらはそれぞれ、

$$\mathbf{A}_\mu^{(0)'} = \mathbf{T} \mathbf{A}_\mu^{(0)} \mathbf{T}^{-1} - \partial_\mu \mathbf{T} \cdot \mathbf{T}^{-1}, \quad (1.15)$$

$$\mathbf{A}_\mu^{(1)'} = \mathbf{T} \mathbf{A}_\mu^{(1)} \mathbf{T}^{-1} \quad (1.16)$$

と変換する。 $\mathbf{A}_\mu^{(1)}$ は、(1.4)を満たすためには不要であり、0であっても困ることはない。よって、 $\mathbf{A}_\mu^{(1)} = 0$ と置く。このとき、

$$(\nabla_\mu \psi)^A = \partial_\mu \psi^A + A_\mu^r (\mathbf{G}_r)^A_B \psi^B \quad (1.17)$$

となる。 $A_\mu^r$ が一般のゲージ場である(線形リー群 $G$ のゲージ場とも呼ばれる)。

ゲージ場の変換則は、

$$A_\mu^r = \alpha^r_s(\varepsilon) A_\mu^s - l^r_s(\varepsilon) \partial_\mu \varepsilon^s \quad (1.18)$$

となる。実は、

$$\alpha^r_s(\varepsilon) = [\exp(\mathbf{e})]_s^r, \quad [\mathbf{e}]_b^a \stackrel{\text{def}}{=} \varepsilon^r f_{rb}^a \quad (1.19)$$

である[2]。よって、

$$\begin{aligned} l^r_s(\varepsilon) &= \int_0^1 ds [\exp(s\mathbf{e})]_s^r \\ &= \int_0^1 ds \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{n!} s^n [e^n]_s^r \\ &= \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{(n+1)!} [e^n]_s^r \end{aligned} \quad (1.20)$$

である。

$\mathbf{T}(\varepsilon)$ が(1.6)の形で書けない場合を考える。まず、線形リー群の連結成分について復習する。集合 $A$ の2元 $a, b$ が結ばれているとは、 $a$ を始点、 $b$ を終点とする、 $A$ に含まれる連続曲線が存在することである。 $A$ の元 $a$ と $A$ 内で結ばれている元の集合を $C(a)$ と書き、 $a$ を含む連結成分という。線形リー群 $G$ の単位元を含む連結成分を $G_0$ とする。このとき、 $G$ の元 $g$ を含む連結成分 $C(g)$ は、 $C(g) = gG_0 = G_0g$ と書ける[1]。また、 $G_0$ の任意の元 $\mathbf{T}_0$ は、 $G$ のリー代数 $\mathfrak{g}$ の有限個の元 $\mathbf{E}_1, \mathbf{E}_2, \dots, \mathbf{E}_n$ を用いて、

$$\mathbf{T}_0 = \exp(\mathbf{E}_1) \exp(\mathbf{E}_2) \cdots \exp(\mathbf{E}_n) \quad (1.21)$$

<sup>3)</sup> $\mathbf{T}(\varepsilon)$ が(1.6)の形で書けない場合は、(1.24)を参照。

と書ける [1]。上の 2 つの定理より、 $\mathbf{T}(x)$  が  $G$  のある連結成分  $G_i$  の元の時、 $G_i$  の  $x$  に依らない元  $\mathbf{T}_i$  と、 $G_0$  の元  $\mathbf{T}_0(x)$  が存在し、

$$\mathbf{T}(x) = \mathbf{T}_i \mathbf{T}_0(x), \quad \mathbf{T}_0(x) = \exp(\mathbf{E}_1(x)) \exp(\mathbf{E}_2(x)) \cdots \exp(\mathbf{E}_n(x)) \quad (1.22)$$

と書ける。特に、 $G_i = G_0$  の時、 $\mathbf{T}_i = 1$  (単位元) である。さて、 $\mathbf{E}_k(x) = \varepsilon_{(k)}^r(x) \mathbf{G}_r$  と書くと、(1.12) より、

$$\partial_\mu e^{\mathbf{E}_k(x)} \cdot e^{-\mathbf{E}_k(x)} = (\alpha^{(k)}(x))_s^r \mathbf{G}_r \partial_\mu \varepsilon_{(k)}^s \quad (1.23)$$

と書ける。 $(\alpha^{(k)}(x))_s^r$  は実数である。また、 $X \in G, A \in \mathfrak{g}$  とすると、 $XAX^{-1} \in \mathfrak{g}$  であるから、(1.22) より、

$$\partial_\mu \mathbf{T} \cdot \mathbf{T}^{-1} = \sum_{k=1}^n (\beta^{(k)}(x))_s^r \mathbf{G}_r \partial_\mu \varepsilon_{(k)}^s \quad (1.24)$$

の形となる。 $(\beta^{(k)}(x))_s^r$  は実数である。よって、 $\partial_\mu \mathbf{T} \cdot \mathbf{T}^{-1}$  はリー代数に値を取る。

(1.9) は次のように示される。今、

$$C(x) \stackrel{\text{def}}{=} e^{-xH(\alpha)} \frac{\partial}{\partial \alpha^n} e^{xH(\alpha)}$$

と置くと、 $C(0) = 0$  であり、

$$\frac{dC(x)}{dx} = e^{-xH(\alpha)} \frac{\partial H(\alpha)}{\partial \alpha^n} e^{xH(\alpha)}$$

を得る。これを  $x = 0$  から  $x = 1$  まで積分して、

$$C(1) = e^{-H(\alpha)} \frac{\partial e^{H(\alpha)}}{\partial \alpha^n} = \int_0^1 dx e^{-xH(\alpha)} \frac{\partial H(\alpha)}{\partial \alpha^n} e^{xH(\alpha)}$$

を得る。これに左から  $e^{H(\alpha)}$  をかけて (1.9) を得る。

## 2 一般相対論での共変微分

この章は [2] を参考にした。

### 2.1 共変微分

スカラー  $\phi$  の微分  $\partial_\mu \phi$  は 1 形式の成分である。つまり、

$$\partial'_\mu \phi' = \frac{\partial x^\nu}{\partial x'^\mu} \partial_\nu \phi \quad (2.1)$$

であり、1 形式の成分の変換則を満たす。 $T_{\mu_1 \mu_2 \dots \mu_r}^{\nu_1 \nu_2 \dots \nu_s}$  をテンソルの成分とする。ただし、 $s + r \geq 1$  とする。この時、 $\partial_\mu T_{\mu_1 \mu_2 \dots \mu_r}^{\nu_1 \nu_2 \dots \nu_s}$  は、テンソルの成分でない。この量を修正して、 $(r + 1, s)$  型のテンソルの成分を得ることを考える。

テンソルの成分を  $\psi^A$  と書く。アフィン変換

$$dx'^\mu = a^\mu_\nu dx^\nu, \quad a^\mu_\nu \in \text{GL}(n, \mathbb{R}) \quad (2.2)$$

によって、 $\psi^A$  は、

$$\psi'^A = \mathbf{T}^A_B(a) \psi^B \quad (2.3)$$

と変換する<sup>4)</sup>。このとき、

$$\nabla_\mu \psi^A = \partial_\mu \psi^A + (\Gamma_\mu)^A_B \psi^B \quad (2.8)$$

という量 (これを共変微分と呼ぶ) が  $(r + 1, s)$  型のテンソルの成分になるようにしたい。そのためには、

$$\partial'_\mu \psi'^A + (\Gamma'_\mu)^A_B \psi'^B = \frac{\partial x^\alpha}{\partial x'^\mu} \mathbf{T}^A_B \nabla_\alpha \psi^B \quad (2.9)$$

であれば良い。左辺は、

$$\begin{aligned} (\text{左辺}) &= \frac{\partial x^\alpha}{\partial x'^\mu} \partial_\alpha (\mathbf{T}^A_B \psi^B) + (\Gamma'_\mu)^A_B \mathbf{T}^B_C \psi^C \\ &= \frac{\partial x^\alpha}{\partial x'^\mu} \partial_\alpha \mathbf{T}^A_B \psi^B + \frac{\partial x^\alpha}{\partial x'^\mu} \mathbf{T}^A_B \partial_\alpha \psi^B + (\Gamma'_\mu)^A_B \mathbf{T}^B_C \psi^C \end{aligned} \quad (2.10)$$

<sup>4)</sup>例えば、 $\psi^A = T_\lambda^{\mu\nu}$  の時、 $\psi^B = T_\gamma^{\alpha\beta}$  と書くと、

$$\mathbf{T}^A_B = (a^{-1})^\gamma_\lambda a^\mu_\alpha a^\nu_\beta \quad (2.4)$$

である。続けて変換

$$dx''^\mu = b^\mu_\nu dx'^\nu \quad (2.5)$$

を行うと、

$$\psi''^A = \mathbf{T}^A_C(b) \mathbf{T}^C_B(a) \psi^B = \mathbf{T}^A_B(b \cdot a) \psi^B \quad (2.6)$$

である。これより、

$$\mathbf{T}^A_B(b \cdot a) = \mathbf{T}^A_C(b) \mathbf{T}^C_B(a) \quad (2.7)$$

であり、 $\mathbf{T}$  はアフィン変換の表現行列である

であり、右辺は、

$$(右辺) = \frac{\partial x^\alpha}{\partial x'^\mu} \mathbf{T}_B^A \partial_\alpha \psi^B + \frac{\partial x^\alpha}{\partial x'^\mu} \mathbf{T}_B^A (\Gamma_\alpha)^B_C \psi^C \quad (2.11)$$

である。よって、

$$\frac{\partial x^\alpha}{\partial x'^\mu} \partial_\alpha \mathbf{T}_C^A + (\Gamma'_\mu)^A_B \mathbf{T}_C^B = \frac{\partial x^\alpha}{\partial x'^\mu} \mathbf{T}_B^A (\Gamma_\alpha)^B_C, \quad (2.12)$$

$$(\Gamma'_\mu)^A_B = \frac{\partial x^\alpha}{\partial x'^\mu} \left[ -\partial_\alpha \mathbf{T}_C^A \cdot (\mathbf{T}^{-1})^C_B + \mathbf{T}_D^A (\Gamma_\alpha)^D_C (\mathbf{T}^{-1})^C_B \right] \quad (2.13)$$

を得る。

(1.24) より、(2.13) の右辺第1項の  $\partial_\alpha \mathbf{T} \cdot \mathbf{T}^{-1}$  の項は、リー代数の基底の線形結合となる。微小アフィン変換は、

$$dx'^\mu = dx^\mu + \varepsilon^\mu_\nu(x) dx^\nu \quad (2.14)$$

であり<sup>5)</sup>、これに対してテンソル  $\psi^A$  は、

$$\delta \psi^A = \varepsilon^\lambda_\nu(x) (\mathbf{G}^\nu_\lambda)^A_B \psi^B \quad (2.15)$$

と変換する。 $\mathbf{G}^\nu_\mu$  は、アフィン変換群の  $n^2$  個の生成子である。これは、

$$[\mathbf{G}^\nu_\mu, \mathbf{G}^\beta_\alpha] = \delta^\nu_\alpha \mathbf{G}^\beta_\mu - \delta^\beta_\mu \mathbf{G}^\nu_\alpha \quad (2.16)$$

を満たす<sup>6)</sup>。 $(\Gamma_\mu)^A_B$  は、 $(\mathbf{G}^\nu_\lambda)^A_B$  の線形結合の項

$$(\Gamma_\mu^{(0)})^A_B \stackrel{\text{def}}{=} \Gamma^\lambda_{\nu\mu} (\mathbf{G}^\nu_\lambda)^A_B \quad (2.18)$$

を含むべきである。それ以外の項を  $(\Gamma_\mu^{(1)})^A_B$  と書くと、 $(\Gamma_\mu^{(0)})^A_B, (\Gamma_\mu^{(1)})^A_B$  はそれぞれ、

$$(\Gamma_\mu^{(0)'})^A_B = \frac{\partial x^\alpha}{\partial x'^\mu} \left[ -(\partial_\alpha \mathbf{T} \cdot \mathbf{T}^{-1})^A_B + (\mathbf{T} \Gamma_\alpha^{(0)} \mathbf{T}^{-1})^A_B \right], \quad (2.19)$$

$$(\Gamma_\mu^{(1)'})^A_B = \frac{\partial x^\alpha}{\partial x'^\mu} (\mathbf{T} \Gamma_\alpha^{(1)} \mathbf{T}^{-1})^A_B \quad (2.20)$$

という変換則を満たす。従って、 $\partial_\mu \psi^A + (\Gamma_\mu^{(0)})^A_B \psi^B$  および  $(\Gamma_\mu^{(1)})^A_B \psi^B$  は、それぞれが  $(r+1, s)$  型のテンソルの成分になってる。よって、 $\Gamma_\mu^{(1)}$  の部分は、共変微分  $\partial_\mu \psi^A + (\Gamma_\mu)^A_B \psi^B$  を  $(r+1, s)$  型のテンソルの成分にする目的のためには不要である。そのため、ここでは、 $\Gamma_\mu^{(1)} = 0$  とする。即ち、

$$(\Gamma_\mu)^A_B = \Gamma^\lambda_{\nu\mu} (\mathbf{G}^\nu_\lambda)^A_B \quad (2.21)$$

<sup>5)</sup> この  $\varepsilon^\mu_\nu(x)$  は、ある微小量  $\varepsilon^\mu(x)$  を用いて、 $\varepsilon^\mu_\nu = \partial_\nu \varepsilon^\mu$  と書ける。(2.14) は座標変換  $x'^\mu = x^\mu + \varepsilon^\mu(x)$  に対応する。

<sup>6)</sup> 上式は、例えば  $\psi^A = T^\alpha$  の時、 $\psi^B = T^\beta$  と書くと、

$$(\mathbf{G}^\nu_\mu)^{\alpha\beta} = \delta^\alpha_\mu \delta^\nu_\beta \quad (2.17)$$

であることを用いると分かる。

である。このとき、 $(\Gamma'_\mu)^A_B = \Gamma'^\lambda_{\nu\mu} (\mathbf{G}^\nu_\lambda)^A_B$  となる。

$\Gamma'^\lambda_{\nu\mu}$  を接続と呼ぶ。

特に、 $\psi^A = T^\lambda$  とし、 $\psi^B = T^\nu$  とすると、(2.17), (2.13), (2.21) と、

$$\mathbf{T}^\lambda_\nu = a^\lambda_\nu = \frac{\partial x'^\lambda}{\partial x^\nu} \quad (2.22)$$

より、

$$\Gamma'^\lambda_{\nu\mu} = \frac{\partial x^\alpha}{\partial x'^\mu} \left[ -\frac{\partial x^\gamma}{\partial x'^\nu} \frac{\partial^2 x'^\lambda}{\partial x^\alpha \partial x^\gamma} + \frac{\partial x'^\lambda}{\partial x^\delta} \frac{\partial x^\gamma}{\partial x'^\nu} \Gamma^\delta_{\gamma\alpha} \right] \quad (2.23)$$

を得る。これの第1項は、

$$\begin{aligned} -\frac{\partial x^\alpha}{\partial x'^\mu} \frac{\partial x^\gamma}{\partial x'^\nu} \frac{\partial^2 x'^\lambda}{\partial x^\alpha \partial x^\gamma} &= -\frac{\partial}{\partial x^\gamma} \left[ \frac{\partial x^\alpha}{\partial x'^\mu} \frac{\partial x^\gamma}{\partial x'^\nu} \frac{\partial x'^\lambda}{\partial x^\alpha} \right] + \frac{\partial x'^\lambda}{\partial x^\alpha} \frac{\partial}{\partial x^\gamma} \left[ \frac{\partial x^\alpha}{\partial x'^\mu} \frac{\partial x^\gamma}{\partial x'^\nu} \right] \\ &= -\frac{\partial}{\partial x^\gamma} \left[ \delta^\lambda_\mu \frac{\partial x^\gamma}{\partial x'^\nu} \right] + \frac{\partial x'^\lambda}{\partial x^\alpha} \frac{\partial^2 x^\alpha}{\partial x^\gamma \partial x'^\mu} \frac{\partial x^\gamma}{\partial x'^\nu} + \frac{\partial x'^\lambda}{\partial x^\alpha} \frac{\partial x^\alpha}{\partial x'^\mu} \frac{\partial^2 x^\gamma}{\partial x^\gamma \partial x'^\nu} \\ &= \frac{\partial x'^\lambda}{\partial x^\alpha} \frac{\partial^2 x^\alpha}{\partial x^\gamma \partial x'^\mu} \frac{\partial x^\gamma}{\partial x'^\nu} \\ &= \frac{\partial x'^\lambda}{\partial x^\alpha} \frac{\partial^2 x^\alpha}{\partial x'^\nu \partial x'^\mu} \end{aligned} \quad (2.24)$$

なので、

$$\Gamma'^\lambda_{\nu\mu} = \frac{\partial x'^\lambda}{\partial x^\alpha} \frac{\partial^2 x^\alpha}{\partial x'^\nu \partial x'^\mu} + \frac{\partial x'^\lambda}{\partial x^\delta} \frac{\partial x^\gamma}{\partial x'^\nu} \frac{\partial x^\alpha}{\partial x'^\mu} \Gamma^\delta_{\gamma\alpha} \quad (2.25)$$

とも書ける。

ここで、

$$\begin{aligned} (\tilde{\Gamma}'_\mu)^A_B &\stackrel{\text{def}}{=} \Gamma'^\lambda_{\nu\mu} (\mathbf{G}^\nu_\lambda)^A_B \\ &= \frac{\partial x^\alpha}{\partial x'^\mu} \left[ -\frac{\partial x^\gamma}{\partial x'^\nu} \frac{\partial^2 x'^\lambda}{\partial x^\alpha \partial x^\gamma} (\mathbf{G}^\nu_\lambda)^A_B + \frac{\partial x'^\lambda}{\partial x^\delta} \frac{\partial x^\gamma}{\partial x'^\nu} \Gamma^\delta_{\gamma\alpha} (\mathbf{G}^\nu_\lambda)^A_B \right] \end{aligned} \quad (2.26)$$

とする。 $\Gamma'_\mu = \tilde{\Gamma}'_\mu$  と同値な

$$-\partial_\alpha \mathbf{T}^A_C \cdot (\mathbf{T}^{-1})^C_B + \mathbf{T}^A_D (\Gamma_\alpha)^D_C (\mathbf{T}^{-1})^C_B = -\frac{\partial x^\gamma}{\partial x'^\nu} \frac{\partial^2 x'^\lambda}{\partial x^\alpha \partial x^\gamma} (\mathbf{G}^\nu_\lambda)^A_B + \frac{\partial x'^\lambda}{\partial x^\delta} \frac{\partial x^\gamma}{\partial x'^\nu} \Gamma^\delta_{\gamma\alpha} (\mathbf{G}^\nu_\lambda)^A_B \quad (2.27)$$

を示す。そのためには、微小変換

$$x'^\mu = x^\mu + \varepsilon^\mu, \quad (2.28)$$

$$\frac{\partial x'^\mu}{\partial x^\nu} = \delta^\mu_\nu + \frac{\partial \varepsilon^\mu}{\partial x^\nu} \quad (2.29)$$

に対して示せば良い。この時、

$$\mathbf{T}^A_B = \delta^A_B + \frac{\partial \varepsilon^\lambda}{\partial x^\nu} (\mathbf{G}^\nu_\lambda)^A_B, \quad (2.30)$$

$$(\mathbf{T}^{-1})^C_B = \delta^C_B - \frac{\partial \varepsilon^\lambda}{\partial x^\nu} (\mathbf{G}^\nu_\lambda)^C_B \quad (2.31)$$

および、

$$\frac{\partial x^\mu}{\partial x^{\nu'}} = \delta_\nu^\mu - \frac{\partial \varepsilon^\mu}{\partial x^{\nu'}}, \quad (2.32)$$

$$\frac{\partial^2 x'^\lambda}{\partial x^\alpha \partial x^\gamma} = \frac{\partial^2 \varepsilon^\lambda}{\partial x^\alpha \partial x^\gamma} \quad (2.33)$$

である。まず、 $\varepsilon$  の1次までで、

$$\partial_\alpha \mathbf{T}_C^A \cdot (\mathbf{T}^{-1})^C_B = \frac{\partial^2 \varepsilon^\lambda}{\partial x^\alpha \partial x^\nu} (\mathbf{G}^\nu_\lambda)^A_B, \quad (2.34)$$

$$\frac{\partial x^\gamma}{\partial x^{\nu'}} \frac{\partial^2 x'^\lambda}{\partial x^\alpha \partial x^\gamma} (\mathbf{G}^\nu_\lambda)^A_B = \frac{\partial^2 \varepsilon^\lambda}{\partial x^\alpha \partial x^\nu} (\mathbf{G}^\nu_\lambda)^A_B \quad (2.35)$$

なので、

$$\partial_\alpha \mathbf{T}_C^A \cdot (\mathbf{T}^{-1})^C_B = \frac{\partial x^\gamma}{\partial x^{\nu'}} \frac{\partial^2 x'^\lambda}{\partial x^\alpha \partial x^\gamma} (\mathbf{G}^\nu_\lambda)^A_B \quad (2.36)$$

である。次に、 $\varepsilon$  の1次までで、

$$\begin{aligned} \mathbf{T}_D^A (\Gamma_\alpha)^D_C (\mathbf{T}^{-1})^C_B &= (\Gamma_\alpha)^A_B + \frac{\partial \varepsilon^\lambda}{\partial x^\nu} \Gamma_{\gamma\alpha}^\beta ([\mathbf{G}^\nu_\lambda, \mathbf{G}^\gamma_\beta])^A_B \\ &= (\Gamma_\alpha)^A_B + \frac{\partial \varepsilon^\lambda}{\partial x^\nu} \Gamma_{\gamma\alpha}^\beta (\delta_\beta^\nu \mathbf{G}^\gamma_\lambda - \delta_\lambda^\gamma \mathbf{G}^\nu_\beta)^A_B \\ &= (\Gamma_\alpha)^A_B + \frac{\partial \varepsilon^\lambda}{\partial x^\beta} \Gamma_{\gamma\alpha}^\beta (\mathbf{G}^\gamma_\lambda)^A_B - \frac{\partial \varepsilon^\gamma}{\partial x^\nu} \Gamma_{\gamma\alpha}^\beta (\mathbf{G}^\nu_\beta)^A_B \end{aligned} \quad (2.37)$$

であり、

$$\frac{\partial x'^\lambda}{\partial x^\delta} \frac{\partial x^\gamma}{\partial x^{\nu'}} \Gamma_{\gamma\alpha}^\delta (\mathbf{G}^\nu_\lambda)^A_B = (\Gamma_\alpha)^A_B + \frac{\partial \varepsilon^\lambda}{\partial x^\delta} \Gamma_{\nu\alpha}^\delta (\mathbf{G}^\nu_\lambda)^A_B - \frac{\partial \varepsilon^\gamma}{\partial x^\nu} \Gamma_{\gamma\alpha}^\lambda (\mathbf{G}^\nu_\lambda)^A_B \quad (2.38)$$

なので、

$$\mathbf{T}_D^A (\Gamma_\alpha)^D_C (\mathbf{T}^{-1})^C_B = \frac{\partial x'^\lambda}{\partial x^\delta} \frac{\partial x^\gamma}{\partial x^{\nu'}} \Gamma_{\gamma\alpha}^\delta (\mathbf{G}^\nu_\lambda)^A_B \quad (2.39)$$

である。以上より、 $\Gamma'_\mu = \tilde{\Gamma}'_\mu$  が示された。

よって、(2.23) の変換則を持つ量  $\Gamma^\lambda_{\nu\mu}$  を用いて、共変微分

$$\nabla_\mu \psi^A = \partial_\mu \psi^A + \Gamma^\lambda_{\nu\mu} (\mathbf{G}^\nu_\lambda)^A_B \psi^B \quad (2.40)$$

を定義すると、それは  $(r+1, s)$  型テンソルの成分である。

なお、スカラー  $\phi$  の共変微分は

$$\nabla_\mu \phi \stackrel{\text{def}}{=} \partial_\mu \phi \quad (2.41)$$

とすれば良い。この節の最初に述べたように、この量は1形式の成分の変換則を満たす。また、スカラーに対しては上の議論で  $\mathbf{T} = 1$  とすればよく、 $\mathbf{G}^\nu_\lambda = 0$  となることから明らかである。

今、

$$C^\lambda_{\nu\mu} \stackrel{\text{def}}{=} \Gamma^\lambda_{\nu\mu} - \Gamma^\lambda_{\mu\nu} \quad (2.42)$$

とすると、(2.25) より、これは  $(2, 1)$  型テンソルの成分の変換則に従う。対応するテンソルを捩率 (torsion) テンソルという。

## 2.2 共変微分の具体的な式

具体的に共変微分を求める。微小変換  $x'^{\mu} = x^{\mu} + \varepsilon^{\mu}$  に対して、これに対してテンソル  $\psi^A$  は、

$$\delta\psi^A = \frac{\partial\varepsilon^{\lambda}}{\partial x^{\nu}}(\mathbf{G}^{\nu}_{\lambda})^A_B\psi^B \quad (2.43)$$

と変換する。この時、共変微分は、

$$\nabla_{\mu}\psi^A = \partial_{\mu}\psi^A + \Gamma^{\lambda}_{\nu\mu}(\mathbf{G}^{\nu}_{\lambda})^A_B\psi^B$$

であった。例えば、

$$\delta A^{\mu} = \frac{\partial\varepsilon^{\mu}}{\partial x^{\nu}}A^{\nu}, \quad (2.44)$$

$$\delta A_{\nu} = -\frac{\partial\varepsilon^{\mu}}{\partial x^{\nu}}A_{\mu} \quad (2.45)$$

より、

$$\nabla_{\rho}A^{\mu} = \partial_{\rho}A^{\mu} + \Gamma^{\mu}_{\nu\rho}A^{\nu}, \quad (2.46)$$

$$\nabla_{\rho}A_{\nu} = \partial_{\rho}A_{\nu} - \Gamma^{\mu}_{\nu\rho}A_{\mu} \quad (2.47)$$

となる。一般に、

$$\begin{aligned} \nabla_{\rho}T_{\mu_1\cdots\mu_r}^{\nu_1\cdots\nu_s} &= \partial_{\rho}T_{\mu_1\cdots\mu_r}^{\nu_1\cdots\nu_s} - \sum_{i=1}^r \Gamma^{\alpha}_{\mu_i\rho}T_{\mu_1\cdots\mu_{i-1}\alpha\mu_{i+1}\cdots\mu_r}^{\nu_1\cdots\nu_s} \\ &\quad + \sum_{j=1}^s \Gamma^{\nu_j}_{\alpha\rho}T_{\mu_1\cdots\mu_r}^{\nu_1\cdots\nu_{j-1}\alpha\nu_{j+1}\cdots\nu_s} \end{aligned} \quad (2.48)$$

である。

## 2.3 共変微分の性質

$T^A, S^B$  をテンソルの成分とすると、

$$\begin{aligned} \delta(T^A S^B) &= \delta T^A S^B + T^A \delta S^B \\ &= \left[ \frac{\partial\varepsilon^{\lambda}}{\partial x^{\nu}}(\mathbf{G}^{\nu}_{\lambda})^A_{A'}T^{A'} \right] S^B + T^A \frac{\partial\varepsilon^{\lambda}}{\partial x^{\nu}}(\mathbf{G}^{\nu}_{\lambda})^B_{A'}S^{B'} \end{aligned} \quad (2.49)$$

であるから、ライプニッツ則

$$\nabla_{\mu}(T^A S^B) = (\nabla_{\mu}T^A)S^B + T^A \nabla_{\mu}S^B \quad (2.50)$$

が成り立つ。 $T^A S^B$  において、 $A$  と  $B$  の添え字の間で縮約をした場合も、ライプニッツ則が成り立つ。例えば、 $\psi^{\alpha} \stackrel{\text{def}}{=} T^{\alpha\beta} S_{\beta}$  に対して、

$$\delta\psi^{\alpha} = \delta T^{\alpha\beta} S_{\beta} + T^{\alpha\beta} \delta S_{\beta} \quad (2.51)$$

であるから、

$$\nabla_\mu(T^{\alpha\beta}S_\beta) = (\nabla_\mu T^{\alpha\beta})S_\beta + T^{\alpha\beta}\nabla_\mu S_\beta \quad (2.52)$$

が成り立つ。

$\delta_\alpha^\beta$  は座標変換によって値を変えない ( $\delta\delta_\alpha^\beta = 0$ )。また、 $\partial_\mu\delta_\alpha^\beta = 0$  であるから、

$$\nabla_\mu\delta_\alpha^\beta = 0 \quad (2.53)$$

である。これより、例えば、

$$\delta_\alpha^\beta\nabla_\mu T^{\alpha\gamma} = \nabla_\mu(\delta_\alpha^\beta T^{\alpha\gamma}) = \nabla_\mu T^{\beta\gamma} \quad (2.54)$$

のように、 $\delta_\alpha^\beta$  は共変微分を通り抜けることができる。また、 $\delta_\alpha^\beta = g_{\alpha\gamma}g^{\gamma\beta}$  なので、

$$g^{\gamma\beta}\nabla_\mu g_{\alpha\gamma} + g_{\alpha\gamma}\nabla_\mu g^{\gamma\beta} = 0, \quad (2.55)$$

$$\nabla_\mu g^{\alpha\beta} = -g^{\delta\alpha}g^{\gamma\beta}\nabla_\mu g_{\delta\gamma} \quad (2.56)$$

を得る。

多くの場合、

$$\nabla_\mu g_{\alpha\beta} = 0 \quad (2.57)$$

を要請する<sup>7)</sup>。このとき (2.56) より、

$$\nabla_\mu g^{\alpha\beta} = 0 \quad (2.58)$$

が従う。 $g_{\alpha\beta}$  や  $g^{\alpha\beta}$  は共変微分を通り抜けることができる。例えば、

$$g^{\alpha\beta}\nabla_\mu A_\beta = \nabla_\mu(g^{\alpha\beta}A_\beta) \equiv \nabla_\mu A^\alpha \quad (2.59)$$

である。

## 2.4 共変微分の交換関係

ところで、 $\psi^A$  をテンソルの成分として、

$$[\nabla_\mu, \nabla_\nu]\psi^A \stackrel{\text{def}}{=} \nabla_\mu\nabla_\nu\psi^A - \nabla_\nu\nabla_\mu\psi^A \quad (2.60)$$

という量を考えると、曲率テンソルが現れる。まず、

$$\delta\nabla_\nu\psi^A = \frac{\partial\varepsilon^\lambda}{\partial x^\rho}(\mathbf{G}^\rho{}_\lambda)^A{}_B\nabla_\nu\psi^B - \frac{\partial\varepsilon^\rho}{\partial x^\nu}\nabla_\rho\psi^A \quad (2.61)$$

より、

$$\begin{aligned} \nabla_\mu\nabla_\nu\psi^A &= \partial_\mu\nabla_\nu\psi^A + \Gamma^\lambda{}_{\rho\mu}(\mathbf{G}^\rho{}_\lambda)^A{}_B\nabla_\nu\psi^B - \Gamma^\rho{}_{\nu\mu}\nabla_\rho\psi^A \\ &= \partial_\mu\partial_\nu\psi^A + \partial_\mu\Gamma^\lambda{}_{\rho\nu}(\mathbf{G}^\rho{}_\lambda)^A{}_B\psi^B + \Gamma^\lambda{}_{\rho\nu}(\mathbf{G}^\rho{}_\lambda)^A{}_B\partial_\mu\psi^B + \Gamma^\lambda{}_{\rho\mu}(\mathbf{G}^\rho{}_\lambda)^A{}_B\partial_\nu\psi^B \\ &\quad + \Gamma^\lambda{}_{\rho\mu}\Gamma^\alpha{}_{\beta\nu}(\mathbf{G}^\rho{}_\lambda)^A{}_C(\mathbf{G}^\beta{}_\alpha)^C{}_B\psi^B - \Gamma^\rho{}_{\nu\mu}\nabla_\rho\psi^A \end{aligned} \quad (2.62)$$

<sup>7)</sup>Weyl のゲージ理論では、この式は成り立たない。

である。よって、

$$[\nabla_\mu, \nabla_\nu]\psi^A = \partial_\mu \Gamma_{\rho\mu}^\lambda (\mathbf{G}^\rho_\lambda)^A_B \psi^B - \partial_\nu \Gamma_{\rho\nu}^\lambda (\mathbf{G}^\rho_\lambda)^A_B \psi^B + C^\rho_{\mu\nu} \nabla_\rho \psi^A \\ + \Gamma_{\rho\mu}^\lambda \Gamma_{\beta\nu}^\alpha (\mathbf{G}^\rho_\lambda)^A_C (\mathbf{G}^\beta_\alpha)^C_B \psi^B - \Gamma_{\rho\nu}^\lambda \Gamma_{\beta\mu}^\alpha (\mathbf{G}^\rho_\lambda)^A_C (\mathbf{G}^\beta_\alpha)^C_B \psi^B \quad (2.63)$$

である。右辺第2行目は、

$$\Gamma_{\rho\mu}^\lambda \Gamma_{\beta\nu}^\alpha (\mathbf{G}^\rho_\lambda)^A_C (\mathbf{G}^\beta_\alpha)^C_B \psi^B - \Gamma_{\beta\nu}^\alpha \Gamma_{\rho\mu}^\lambda (\mathbf{G}^\beta_\alpha)^A_C (\mathbf{G}^\rho_\lambda)^C_B \psi^B \\ = \Gamma_{\rho\mu}^\lambda \Gamma_{\beta\nu}^\alpha ([\mathbf{G}^\rho_\lambda, \mathbf{G}^\beta_\alpha])^A_B \psi^B \\ = \Gamma_{\rho\mu}^\lambda \Gamma_{\beta\nu}^\alpha (\delta_\alpha^\rho \mathbf{G}^\beta_\lambda - \delta_\lambda^\beta \mathbf{G}^\rho_\alpha)^A_B \psi^B \\ = (\Gamma_{\sigma\mu}^\lambda \Gamma_{\rho\nu}^\sigma - \Gamma_{\sigma\nu}^\lambda \Gamma_{\rho\mu}^\sigma) (\mathbf{G}^\rho_\lambda)^A_B \psi^B \quad (2.64)$$

なので、

$$[\nabla_\mu, \nabla_\nu]\psi^A = R^\alpha_{\beta\mu\nu} (\mathbf{G}^\beta_\alpha)^A_B \psi^B + C^\rho_{\mu\nu} \nabla_\rho \psi^A \quad (2.65)$$

を得る。ここで、

$$R^\mu_{\lambda\alpha\beta} \stackrel{\text{def}}{=} \partial_\alpha \Gamma^\mu_{\lambda\beta} - \partial_\beta \Gamma^\mu_{\lambda\alpha} + \Gamma^\mu_{\rho\alpha} \Gamma^\rho_{\lambda\beta} - \Gamma^\mu_{\rho\beta} \Gamma^\rho_{\lambda\alpha} \quad (2.66)$$

は曲率テンソルである。例えば、

$$[\nabla_\mu, \nabla_\nu]A^\lambda = R^\lambda_{\rho\mu\nu} A^\rho + C^\rho_{\mu\nu} \nabla_\rho A^\lambda \quad (2.67)$$

および、

$$[\nabla_\mu, \nabla_\nu]A_\lambda = -R^\rho_{\lambda\mu\nu} A_\rho + C^\rho_{\mu\nu} \nabla_\rho A_\lambda \quad (2.68)$$

である。

## 2.5 テンソル密度の共変微分

ウエイト  $n$  のテンソル密度を、

$$T'_{\mu_1\mu_2\cdots\mu_r}{}^{\nu_1\nu_2\cdots\nu_s} = \left[ \frac{\partial(x)}{\partial(x')} \right]^n \frac{\partial x^{\lambda_1}}{\partial x'^{\lambda_1}} \cdots \frac{\partial x^{\lambda_r}}{\partial x'^{\lambda_r}} \frac{\partial x'^{\nu_1}}{\partial x^{\sigma_1}} \cdots \frac{\partial x'^{\nu_s}}{\partial x^{\sigma_s}} T_{\lambda_1\lambda_2\cdots\lambda_r}{}^{\sigma_1\sigma_2\cdots\sigma_s} \quad (2.69)$$

と変換する量として導入する。例えば、 $\varepsilon_{\mu_1\cdots\mu_n}$  を完全反対称で  $\varepsilon_{012\cdots n-1} = 1$  という量とする。これはウエイト  $-1$  のテンソル密度である。また、ウエイト  $n$  の擬テンソル密度を

$$T'_{\mu_1\mu_2\cdots\mu_r}{}^{\nu_1\nu_2\cdots\nu_s} = \left| \frac{\partial(x)}{\partial(x')} \right|^n \frac{\partial x^{\lambda_1}}{\partial x'^{\lambda_1}} \cdots \frac{\partial x^{\lambda_r}}{\partial x'^{\lambda_r}} \frac{\partial x'^{\nu_1}}{\partial x^{\sigma_1}} \cdots \frac{\partial x'^{\nu_s}}{\partial x^{\sigma_s}} T_{\lambda_1\lambda_2\cdots\lambda_r}{}^{\sigma_1\sigma_2\cdots\sigma_s} \quad (2.70)$$

と変換する量として導入する。 $\psi^A$  をテンソルとし、 $g = \det(g_{\mu\nu})$  とするとき、 $(\sqrt{-g})^n \psi^A$  はウエイト  $n$  の擬テンソル密度である。テンソル密度や擬テンソル密度の共変微分を考える。

テンソルの時の同様に、微小変換  $x'^\mu = x^\mu + \varepsilon^\mu$  に対して、量  $\psi^A$  が、

$$\delta\psi^A = \frac{\partial\varepsilon^\lambda}{\partial x^\nu} (\mathbf{G}^\nu_\lambda)^A_B \psi^B \quad (2.71)$$

と変換する時、その共変微分は、

$$\nabla_{\mu}\psi^A = \partial_{\mu}\psi^A + \Gamma^{\lambda}_{\nu\mu}(\mathbf{G}^{\nu}_{\lambda})^A_B\psi^B \quad (2.72)$$

である。

$$\frac{\partial(x)}{\partial(x')} = 1 - \partial_{\alpha}\varepsilon^{\alpha} \quad (2.73)$$

なので、

$$\left[\frac{\partial(x)}{\partial(x')}\right]^n = \left|\frac{\partial(x)}{\partial(x')}\right|^n = 1 - n\partial_{\alpha}\varepsilon^{\alpha} \quad (2.74)$$

である。よって、ウエイト  $n$  のテンソル密度や擬テンソル密度の共変微分は、

$$\begin{aligned} \nabla_{\rho}T_{\mu_1\cdots\mu_r}^{\nu_1\cdots\nu_s} &= \partial_{\rho}T_{\mu_1\cdots\mu_r}^{\nu_1\cdots\nu_s} - n\Gamma^{\alpha}_{\rho\mu_1}T_{\mu_2\cdots\mu_r}^{\nu_1\cdots\nu_s} \\ &\quad - \sum_{i=1}^r \Gamma^{\alpha}_{\mu_i\rho}T_{\mu_1\cdots\mu_{i-1}\alpha\mu_{i+1}\cdots\mu_r}^{\nu_1\cdots\nu_s} \\ &\quad + \sum_{j=1}^s \Gamma^{\nu_j}_{\alpha\rho}T_{\mu_1\cdots\mu_r}^{\nu_1\cdots\nu_{j-1}\alpha\nu_{j+1}\cdots\nu_s} \end{aligned} \quad (2.75)$$

である。特にリーマン接続では、

$$\Gamma^{\alpha}_{\rho\mu} = \frac{1}{\sqrt{-g}}\partial_{\rho}\sqrt{-g} \quad (2.76)$$

である。よって、リーマン接続では、

$$\nabla_{\rho}(\sqrt{-g})^n = 0 \quad (2.77)$$

であり、 $\psi^A$  がテンソル (またはテンソル密度, 擬テンソル密度) の時、

$$\nabla_{\rho}[(\sqrt{-g})^n\psi^A] = (\sqrt{-g})^n\nabla_{\rho}\psi^A \quad (2.78)$$

となる。

$T^{\mu}$  をテンソル,  $F^{\mu\nu}$  を反対称テンソルとし、 $\mathbf{T}^{\mu} = \sqrt{-g}T^{\mu}$ ,  $\mathbf{F}^{\mu\nu} = \sqrt{-g}F^{\mu\nu}$  とすると、リーマン接続では、

$$\nabla_{\mu}\mathbf{T}^{\mu} = \partial_{\mu}\mathbf{T}^{\mu}, \quad (2.79)$$

$$\nabla_{\mu}\mathbf{F}^{\mu\nu} = \partial_{\mu}\mathbf{F}^{\mu\nu} \quad (2.80)$$

となる ([3] の p.80)。

## References

- [1] 山内 恭彦, 杉浦 光夫 『連続群論入門』 (培風館, 1960 年).
- [2] 内山龍雄 『一般ゲージ場論序説』 (岩波書店, 1987 年).
- [3] 内山龍雄 『一般相対性理論』 (裳華房, 1978 年).